

日本建築学会技術報告集 執筆要領「7. 注および参考文献」の変更について

参考文献の一部英語表記について

日本建築学会技術報告集では、2020年1月以降投稿の原稿に対して、参考文献の一部（本会論文集と技術報告集）の英語表記が義務付けられます。このような変更がなされる理由は以下の通りです。

- ・技術報告集ならびに構造系論文集と環境系論文集は、世界最大の学術論文データベースであるScopusに既に登録されており、Scientific Journal Ranking (SJR) でのランクを上げるためには、同誌を引用した際に正確にカウントされるよう英文で記載することが必要不可欠である。
- ・計画系論文集についても、今後Scopusに登録されるためには、同様に引用が正確にカウントされるよう同誌を引用した際には英文で記載することが必要不可欠である。

以上の理由により、参考文献の一部（本会論文集と技術報告集）英語表記について、ご協力くださいますようお願いいたします。

●新執筆要領（改正2019年10月18日技術報告集委員会決定 2020年1月1日実施）

※**ハイライト部分**は具体的に変更(このたび追記)された箇所

7. 注および参考文献

- (1) 注および参考文献は、本文の後にそれぞれを使用順に番号を付け、まとめて掲載する。
- (2) 注および参考文献の番号は、本文中の引用個所に肩付き¹⁾、²⁾ 注1)、注2) のように明記する。
- (3) 参考文献の記載方法は以下の通りである。
 - a) 「日本建築学会技術報告集」掲載の技術報告等と「日本建築学会論文集」掲載の論文等の場合、原則として英語で「著者名：標題，誌名，Vol, No., 掲載ページ，発行年月」の順とする。また、この場合に和文の文献については原則として英語と日本語で参考文献を併記すること。その他の論文集等は日本語で「著者名：標題，誌名，Vol, No., 掲載ページ，発行年月」の順とする。 ㊦)
 - b) 単行本の場合、日本語で「著（編）者名：書名，発行所名，発行年」の順とする。 ㊦)
 - c) 著者名は必ず姓名で記す。著者が多い場合には、筆頭者以外は「ほか〇名」で省略することもできる。
 - d) 欧文の場合には、筆頭者は姓を先に記す。また、連名者は「et al.」で省略することもできる。
 - e) 発行年月は、原則として西暦で「1998. 1」 「1998. 2」のように記す。
- (4) 一般に公表されていない文献は、たとえば未発表の技術報告、簡易印刷（コピーしたものなど）の委員会報告や社内報告および私信などは、文献としてあつかわない。必要あれば注とし、引用個所に肩付き^{注1)}、^{注2)} のように明記する。
- (5) 図・表・写真などの引用・転載にあたっては、著者自身が原著者などの著作権所有者の許可をとらなければならない。
- (6) 電子文献については「科学技術情報流通技術基準(SIST) 電子文献参照の書き方」
<https://jipsti.jst.go.jp/sist/handbook/sist02sup/sist02sup.htm> を参照する。 ㊦)
- (7) 注・参考文献記載後の技術報告末尾に「原稿受理日・採用決定年月日」（本会で貼付）の余白を2行程度設ける。 ㊦)
- (8) 記載例 ㊦)

参考文献

- 1) 許永東，依田彰彦，横室 隆：新JIS方法による各種セメントの強さ，日本建築学会大会学術講演梗概集A1，pp. 1-2，1997. 8 ㊦)
- 2) Moriguchi, G., et al.: DEVELOPMENT OF ALL WEATHERS TEMPORARY ROOF SYSTEM WITH TELESCOPIC SUPPORTS, AIJ Journal of Technology and Design, Vol. 1, No. 1, pp. 1-4, 1995. 12 (in Japanese)
森口五郎，谷沢 晋，木村健治，恩村定幸：全天候型仮設屋根システムの開発，日本建築学会技術報告集，第1号，pp. 1-4，1995. 12 ㊦)
- 3) 中村達太郎：日本建築語彙 丸善 1906年，新增補版 1956年 ㊦)
- 4) Luco, J. and Westman, R.: Dynamic Response of Circular Footings, Journal of the Engineering Mechanics, ASCE, Vol. 97, pp. 1381-1395, 1971. 4
- 5) Kenchiku, K. and Tanaka, K.: Field Measurement of VOC in Dust in Residential

Buildings, Journal of Environmental Engineering (Transactions of AIJ), Vol. 77, No. 789, pp. 1789-1798, 2016. 7 (in Japanese)

建築健太郎, 田中建: 住宅におけるダスト中VOC濃度測定, 日本建築学会環境系論文集, 第77巻, 第789号, pp. 1789-1798, 2016. 7 ㊦)

注

注1) 「大工頭中井家文書」(史学第37巻第1号~第46巻第1号) 105によると, 柴重右衛門が中井大和守の配下で勘定方を担当していたことがわかる。また, 長香寺寄託中井家文書に「慶長十五年十九年, 駿河御用少々記」と題する留帳があり, その中の「駿河御城大工作料方にて渡手形之覚」と慶長15年11月15日中井信濃守が作料を請取った旨を柴重右衛門, 村伊右衛門に宛てた覚書の写しで, この両名が中井家の勘定を担当していたことを示している。

<FAQ よくある質問>

【参考文献の一部の英語表記について】

Q1	日本建築学会論文集と日本建築学会技術報告集を参考文献に記載する場合は、日本語のみでも問題ないですか。
A1	日本語のみでの記載は認められません。原則として英語で記載し、さらに和文の文献の場合は原則として日本語でも併記してください。
Q2	日本建築学会論文集と日本建築学会技術報告集を参考文献に記載する場合は、英語のみでも問題ないですか。
A2	英文で執筆された文献を参考文献に記載する場合は英語のみで構いません。和文で執筆された文献を参考文献に記載する場合は、原則として英語と日本語併記で記載してください。
Q3	日本建築学会論文集と日本建築学会技術報告集以外の文献や単行本などについて、英語と日本語で併記する必要はないでしょうか。
A3	日本建築学会論文集と日本建築学会技術報告集以外の文献や単行本などについては、英語と日本語で併記する必要はありません。
Q4	Scopus では、日本語で記載した参考文献は引用数にカウントされないのでしょうか？
A4	日本語で記載された場合は、一切カウントされません。英語で記載された場合は正確な情報が記載されていればカウントされます。 例えば、技術報告集掲載の技術報告の参考文献に同誌掲載の技術報告 2 編が英語で記載されていた場合は、自誌引用として 2 件が加算されます。 例えば、技術報告集掲載の技術報告の参考文献に構造系論文集 1 編が英語で記載されていた場合は、Scopus 採録他誌で引用された数として、構造系論文集側に 1 件が加算されます。(これとは逆に構造系論文集掲載の論文の参考文献に技術報告集掲載の技術報告 1 編が英語で記載されていた場合は、Scopus 採録他誌で引用された数として、技術報告集側に 1 件が加算されます。)

問合せ先

技術報告集委員会 係 Email: gihou(at)aij.or.jp *(at)=@

[日本建築学会 TOP ページ](#)

[日本建築学会技術報告集への投稿についてのご案内ページ](#)